

研究協議まとめ

ひと・環境・カリキュラムへのアプローチから
研究テーマにつながる「具体的な方策」について考える

北海道立生涯学習推進センター
北海道社会教育主事会協議会

1 「ひと」を対象にした具体的な取組

<全体分析>

記述から見えた方向性や共通する事項

- 多世代が循環するモデルの構築する
- 地域資源の発掘力を高める
- 子どものも主体性を中心に据える
- 事業を“続ける仕組み”を意識する
- 社会教育主事としての在り方

1 「ひと」を対象にした具体的な取組

研究協議の記述をもとに6つに分類しました

①対象者を拡大し
多世代連携を生む

②地域資源の
発掘・活用

③子どもの主体性と
成長支援

④運営体制づくり
人材育成

⑤事業設計、広報、
運営の工夫

⑥社会教育主事
としての姿勢

1-①. 「対象者を拡大し多世代連携を生む」

小学生、中高生・大学生・高齢者・地域住民・企業まで巻き込み、各世代が事業に関わる意図をそれぞれにもつことで、人が循環するモデルを構築する。

1-①. 「対象者を拡大し多世代連携を生む」

主な記述

- ・小学生をメインターゲット、中学生をサブターゲットにする
- ・中高生をリーダー・サブリーダーとして育成
- ・高齢者大学・老人会との交流
- ・親子事業化、ママカフェとの連携
- ・障がい者団体とのつながり
- ・地域住民を講師にする
- ・北大生など大学生世代との協働

ここでは、「人材の循環」を強く意識している点が特徴的で単発の交流ではなく、小学生 → 中学生(サブリーダー) → 高校生(リーダー) → 大学生(専門性提供) → 大人(講師)という成長の階段を地域内で行う構想や、地域の強みを最大化している意図が見えました。

1 - ②. 「地域資源の発掘・活用」

★地域の魅力を掘り起こす。

1-②. 「地域資源の発掘・活用」

主な記述

- ・地域の特技を持つ大人を講師にする
- ・図書館ボランティア、ボードゲーム愛好会、
コーヒー販売者の活用
- ・漁師の町の良さを活かし水産高校と連携
- ・社教団体の企画を年1回実施
- ・企業・商工会・地域おこし協力隊との協働
- ・他自治体との連携

ここでは、「地域の人＝教育資源」という考え方が一貫しており、地域の教育力の底上げにより長期的な効果を生むことを想定していることがわかります。

1 - ③. 「子どもの主体性・成長支援」

★伴走型・協働型・関係構築型での
支援や関わり

1-③. 「子どもの主体性・成長支援」

主な記述

- ・可能性を拾うアンテナを張る
- ・不可能をつくらない
- ・子どもが外に出るきっかけづくり
- ・高校生の悩みや思いを聞く
- ・先輩との関わりで見通しを持たせる
- ・主体性を引き出す仕掛け
- ・参加者のやりたいことを全力で叶える

ここでは、「子どもを受け身にしない」「自分でできることを増やす」を大切にしている記述が多く、特に“先輩の経験を循環させる”という視点は、地域に継続的な教育文化をつくることにもつながります。

1-④. 「運営体制づくり・人材育成」

★事業を“回す”だけでなく、
事業で“育てる”関わり

1-④. 「運営体制づくり・人材育成」

主な記述

- ・青少年指導員の育成
- ・ボランティア募集
- ・企業との協働体制づくり
- ・スタッフや講師がかっこよく見える仕掛け
- ・参加者を運営側に巻き込む
- ・51：49の関係性づくり（対等性）
- ・活動後の関わりを大切にする

ここでは、人材が循環する仕組みをつくるための具体的な取組が多く挙げられています。単年度事業だけではなく、継続的な学びのサイクルを回していくための方策が整理されています。

1－⑤. 「事業設計・広報・運営の工夫」

★現状把握から、実務的な課題を
改善する

1-⑤. 「事業設計・広報・運営の工夫」

主な記述

- ・年代別チラシの作成
- ・SNS活用
- ・スタンプラリー形式
- ・プロフィールシート作成
- ・目的の明確化
- ・参加者同士の関係づくり
- ・活動の振り返り・言語化
- ・周知の工夫（写真・タイトル）

ここでは、「どうすれば参加しやすくなるか」、「どうすれば続くか」を見通したアイデアが多くありました。

1 - ⑥. 「社会教育主事としての姿勢・哲学」

★社会教育主事、社会教育士としての
姿勢やあり方…

1-⑥. 「社会教育主事としての姿勢・哲学」

主な記述

- ・嫌がられても良い、関係性をつくる
- ・やれるものはやる、できないことはできるように考える
- ・他人事ではなく自分事として考える人材の発掘
- ・「してもらおう」から「自分でやる」への転換
- ・あえて求められた時に助言する
- ・活動の意義を整理し、上司の理解を促す
- ・いい人材がいるのに関わらない主事の在り方を捉え直す

多くの記述から見えた「伴走・協働・関係構築」という考え方は、これまでの多くのアイデアの土台として共通している。

2 「環境」を対象にした具体的な取組

<全体分析>

記述から見えた方向性や共通する事項

- 物理的環境・心理的環境・組織的環境を一体で捉えている
- 地域資源を教育資源に変換する
- 多世代・多様性・共生を事業に組み込む
- “居場所づくり”と“学びの場づくり”を統合する
- ESD的視点が強く、持続可能な学びを通じた地域づくりを目指す

2 「環境」を対象にした具体的な取組

研究協議の記述をもとに6つに分類しました

①施設・空間の
活用と再設計

②地域資源の発
掘、自然、文化
の活用

③多様な人が共生
できる環境づくり

④学びを深めるための
設備、専門性の活用

⑤組織・体制・
連携の環境づくり

⑥文化・雰囲気・
価値観としての
環境づくり

2-①. 「施設・空間の活用と再設計」

★公民館・図書館・学校・老人会など、
既存施設・団体を“学びの場”として
活用する。

2-①. 「施設・空間の活用と再設計」

主な記述

- ・公民館での共生（許可取り・地盤・車両準備）
- ・図書館を楽しい居場所にする
- ・ボードゲーム設置、本を借りる以外の用途づくり
- ・新複合施設の活用
- ・既存のサークル・市民団体の活用再検討
- ・既存の人が集まる場所を居心地よく改善
- ・公民館・図書館などの積極活用
- ・外から活動の様子が見える場の設定

環境づくりは「箱」を提供するのではなく、“人が自然に集まり、関係が生まれ、学びが起きる空間をデザインする”というアプローチを大切にしていることがわかります。

2－②. 「地域資源の発掘・自然・文化の活用」

★地域の自然・産業・文化を教育資源
として活用する

2-②. 「地域資源の発掘・自然・文化の活用」

主な記述

- ・十勝岳の麓でジオ教育
- ・市内キャンプ場の活用
- ・漁協と連携し普段立ち入れない場所や道具をプログラム化
- ・モルックの活用
- ・スタンプラリーの問題を観光資源に転用
- ・他町の講師のアクティビティに触れ、地元の良さに気づく
- ・冬の交流の家を寒冷地避難所として想定

記述の中に、地域の自然・産業・文化を「教材化」しようとする視点が多くあり、これらの視点は、「持続可能な開発のための教育」の核であり、地域の魅力を再発見する学びにもつながります。

2-③. 「多様な人が共生できる環境づくり」

★ “環境” を「物理的な場」だけではなく、「関係性による場」として捉える

2-③. 「多様な人が共生できる環境づくり」

主な記述

- ・障がいのある方との共生
- ・高齢者による学校支援
- ・子どもによる大人対象の講座
- ・児童生徒と地域の大人の接点づくり
- ・高校生の声を聞く場
- ・椅子の距離・絨毯・装飾など、心理的距離を縮める工夫
- ・「やってみたい」を受け入れる雰囲気づくり

「環境づくり」には、“人が安心して関われる心理的環境”を含まれており、単なる設備の提供ではなく、関係性のデザインに踏み込んだ営みを大切にされていることがわかります。

2-④. 「学びを深めるための設備・専門性の活用」

★学びの場における学習環境としての
機能を高める

2-④. 「学びを深めるための設備・専門性の活用」 主な記述

- ・ 高校・大学の実験室や機材の活用
- ・ 科学部・理科サークルとの連携
- ・ 学びを活かす場づくり
- ・ ESD・SDGsの取り組み

「環境＝学びの質を高める装置」と捉え、特に、学校の専門性を地域に開く発想が多く、活用を通して地域教育力の底上げを目指す記述が多くありました。

2－⑤. 「組織・体制・連携の環境づくり」

★環境を地域の教育文化として
整える視点でのアプローチ

2-⑤. 「組織・体制・連携の環境づくり」

主な記述

- ・教育委員会全体の目的共有
- ・行政・社会教育士・CSなど多部署連携
- ・既存団体を指導者として活用
- ・社会教育委員が地域と接点を持つ場づくり
- ・高校生→中学生を巻き込む仕組み

記述から、「環境」を「場の整備」だけではなく、「多様な主体による協働体制」として捉えていこうとしていることがわかり、これにより学びによる地域の持続可能性を高めようとする姿勢が見えてきます。

2－⑥. 「文化・雰囲気・価値観としての環境づくり」

★社会教育主事・社会教育士としての
姿勢やあり方…

2-⑥. 「文化・雰囲気・価値観としての環境づくり」 主な記述

- ・ 自分にはない良さを認める雰囲気づくり
- ・ 常に開かれている場の見せ方
- ・ 参加者が憧れるスタッフ像をつくる
- ・ 「やってみたい」を実現しやすい環境
- ・ 日常的に集まれる場の創出
- ・ 子ども食堂の実施（居場所づくり）

「環境づくり」において、“人が尊重され、挑戦でき、つながれる文化をつくること”を重視していることがわかり、単なる施設運営に留まらない視点をもって整理されていることがわかります。

3 「カリキュラム」を対象にした具体的な方策

<全体分析>

記述から見えた方向性や共通する事項

- 主体性を育む構造を明確にする
- 学校教育との接続を強める
- 地域資源を教材化し、コーディネートする
- 多様性・インクルージョンを前提にする
- 「参加者→スタッフ→地域の担い手」という循環を意図的に設計する

3 「カリキュラム」を対象にした具体的な方策 研究協議の記述をもとに6つに分類しました

① 学びの構造
(カリキュラムデザイン)

② 主体性を育む
仕掛け

③ 学校教育との接続
(社会に開かれた教育課程)

④ 多様な人が参加し
やすいカリキュラム

⑤ 地域資源・文化
を教材化する

⑥ 運営体制・組織
文化としての
カリキュラム

3-①. 「学びの構造（カリキュラムデザイン）」

★活動の流れ・構造・時間配分・多様な参加方法など、学びを“設計”する
営み

3-①. 「学びの構造（カリキュラムデザイン）」

主な記述

- ・宿泊事業で介入しすぎない、ゆとりを持たせる
- ・トライ&エラーを前提にしたプログラム
- ・参加方法の多様化（どこからでも、どこだけでも参加）
- ・毎年参加しても飽きないよう最低3メニュー
- ・小さな変化をつけて継続性を高める
- ・ゆとりあるカリキュラム設定
- ・見る・知る・支えるなど多様な体験の組み合わせ

「詰め込む」ではなく、“余白をつくり、主体性が生まれる構造を設計する”というアプローチが中心になっており、探究的な学びを支える重要な視点が多く含まれています。

3 - ②. 「主体性を育む仕掛け」

★参加者が自ら動き出したくなる
仕組みをつくる

3-②. 「主体性を育む仕掛け」

主な記述

- ・「やってみたい」と思わせる仕掛け
- ・参加者がプログラムをつくる機会を意図的に作る
- ・立案・実践の経験を積めるプログラム
- ・学びを他者に伝える終末プログラム
- ・参加者がスタッフになっていく工夫
- ・リーダー研修の“ドキドキ感”
- ・北大生協力による子ども会リーダー研修

カリキュラムを通して、“参加者 → 運営者 → 地域の担い手”という成長の階段を意識し、意図的に仕掛けを組み込むことによって、循環を生みだそうとしていることがわかります。

3－③. 「学校教育との接続」

★学校と社会教育をつなぐ
働きかけをする

3－③. 「学校教育との接続」

主な記述

- ・中学校の授業に取り入れる
- ・教員研修、教育バンクの活用
- ・総合的な学習の時間の大幅な変更
- ・地域特産品を自分たちで価格を決めて販売
- ・小中学生が地域のお店のCMをつくる
- ・行政に関わる糸口を見つけるワーク
- ・社会に開かれた教育課程への支援体制の構築

学校教育を外側から支えるのではなく、学校教育そのものを地域とともに再構築する方向に踏み込んでいる記述が多くありました。

3 - ④. 「多様な人が参加できるカリキュラム」

★インクルーシブで、
多様性を前提にした学びを設計する

3-④. 「多様な人が参加できるカリキュラム」

主な記述

- ・障がいのある方も参加できる体制
- ・聾者の生活や気持ちを考える学び
- ・多世代が混ざる仕組み
- ・既存団体が既存事業に関われる工夫
- ・ボランティア育成の事前研修
- ・オンライン講座の実施

取組において、誰も排除しない構造をつくったり、理解を促したりすることを意識して、計画しようとしていることがわかります。

3－⑤. 「地域資源・文化を教材化する」

★地域の文化・産業・人材を学びに
変換する視点をもつ

3-⑤. 「地域資源・文化を教材化する」

主な記述

- ・地域特産品を売り出す学習
- ・資料館・図書館のボランティアクラブ
- ・他市町村の事業との掛け算・足し算・引き算
- ・音楽×餅つき（ディスコ餅つき）
- ・他施設と連携し特色ある活動を波及

取組において、誰も排除しない構造をつくったり、理解を促したりすることを意識して、計画しようとしていることがわかります。

3－⑥. 「運営体制・組織文化としてのカリキュラム」

★カリキュラムを “組織のあり方”
として捉える

3－⑥. 「運営体制・組織文化としてのカリキュラム」 主な記述

- ・年間計画、打合せ資料の作成
- ・既存事業の付加価値をつける
- ・内容のアップデート、横のつながりをつくる
- ・地域住民の意識を高める研修の実施
- ・行政・CS・社会教育士など多部署連携の強化

カリキュラムを「プログラムの内容」ではなく、“地域の学びを支える仕組みそのもの”として捉えて、方策を考えている記述が多くありました。

まとめ：協議の成果より

世代を超えて循環する仕組みの構築

地域資源を教育資源に変換する工夫

学校教育と連動し、

主体性を育む構造の設計

まとめ：協議の成果より

(これまで)

- 事業が単発で終わる
- 参加者＝教育サービスの受け手
- 物理的な”箱”のみの提供



(今後の方向性)

- 人が循環し、自走するシステムをつくる
- 参加者＝地域の新たな担い手
- 「関係性」のデザインによる空間づくり

テーマの追究を通して 「人が循環し、自走する姿」へ

研究テーマに係る Key word

○新たな視点で地域の魅力を掘り起こす

○事業の横展開を図る仕組みづくり

